

成果報告書

令和7年度実践的な防災行動推進に資する災害の記録・課題・教訓の 継承等に関する調査・分析業務

【仕様書(2) 地域における災害教訓の継承・伝承等優良事例の収集・分析】

2026年3月10日

広島大学防災・減災研究センター

目次

- 業務報告書（活動内容について）
 1. 取組みの目的・概要
 2. 実施内容
 3. 来年度以降の計画等について
 4. まとめ

業務報告書（活動内容について）

1.取組の目的・概要

(1)取組の背景	・ 広島県では戦後だけでも次ページに示すような多くの土砂災害を経験しており、その都度、災害発生メカニズムや原因の分析、防災のための対応策の検討などをもとに、ハード対策・ソフト対策を実施している。また、地域で高まった防災意識のもとに、行政側だけでなく、地域住民などが主体となって災害記録や体験談集を作成したり、石碑等を建立したりする等、教訓の伝承に取り組んでいる。また、広島県砂防課では、土砂災害に関する教訓の伝承のために、ホームページ「土砂災害ポータルひろしま」の中に、「地域の砂防情報アーカイブ」を設け、地域に眠っている災害や防災に資する写真や地図や絵図などの資料を収集・掲載し、いつでも誰にでも見てもらえるページを提供している。これらを含めて、災害そのものや被災時の状況等が経験していない人にも伝えられるような工夫を試みてきており、地域活動や防災教育へも活用されている。 ・ NIPPON防災資産に認定されている広島市豪雨災害伝承館や坂町災害伝承ホールに代表される防災施設では、災害教訓の継承や伝承活動、防災教育等が実施されており、広島県内外から多くの方が来館している。 ・ 上記取り組み等により、広島県における土砂災害に関する教訓の継承や伝承活動、防災教育等は全国でもトップレベルで実施されてきているものの、地域住民が主体の自主的な防災活動については、そのノウハウや課題等を次世代や他の地域に繋げていくための仕組みが不足しており、活動の継承に不安を覚える声が各地域の防災リーダーからあがっている。
(2)取組の目的	・ 災害に遭遇した地域や人々の、将来二度とこのような悲惨な経験をしてほしくない、という気持ちで行われている災害の状況や被災者の思いなどの伝承のもとに、それぞれの地域で自主防災活動が積極的に行われている。しかし、時間の経過とともに防災リーダーや被災住民の高齢化や災害記憶自体が薄れていくなどにより、地域防災活動を若い世代や被災経験の無い人々や地域に伝承していくことが難しくなる傾向があることを認識している。 ・ これまでにも広島県砂防課の協力もあり、平成23年度から被災体験談や災害の記録誌、災害当時の状況などを収集し、「土砂災害ポータルひろしま」の中にある「地域の砂防情報アーカイブ」に掲載し、いつでも誰にでも見てもらえるように、また、利活用してもらえるようにしてきており、この取組は引き続き進めていく。 ・ そこで、本研究においては、それぞれの地域の防災リーダーの活動を時代を超えて持続させるため、防災リーダーの考え方や活動内容、工夫、秘訣、課題に感じていること、克服に向け必要に感じていること等をまとめて、映像化されたものを通じて相互に共有できることを目指す。

1.取組の目的・概要(つづき)

広島県で戦後に発生した主な土砂災害の概要

災害名	概要
昭和20年9月 枕崎台風	昭和20年(1945年)9月17日の枕崎台風では暴風雨によって県内で2,000人超もの犠牲者を出す甚大な災害となっているが、数多くの崩壊・土石流等による被害が大きかったことや、戦争による通信網の途絶等が原因で気象情報や防災情報を収集・伝達する手段がなかったことなどによる影響の大きさが明らかとなった。広島県砂防課など行政による災害調査とまとめが特に被害の大きかった呉市を中心になされている(「昭和20年9月17日における呉市の水害について」広島県土木部砂防課、1951)。また、柳田邦男著『空白の天気図』にも調査データとともに発災当時の状況が詳しく記述されている。
昭和42年7月 豪雨	昭和42年(1967年)7月8-9日の豪雨災害では、呉市域では崩壊・土石流等による土砂災害が多数発生し、88人ももの犠牲者が出たが、枕崎台風時の呉市域での犠牲者は1,100人超であったことから、防災対策が進んだことにより犠牲者数減につながったと報告されている。両者の犠牲者数を比較して記載した被害図も作成されているが、大災害であったことに間違いはない。軍港のある町として昭和18年には呉市の人口が40万人超にまで急増しており、その宅地造成等が急傾斜地や過去の洪水や土石流等の氾濫堆積地に急ピッチでなされたところが弱部となっていると思われ、花崗岩類の多い地質条件とも重なって、土砂災害になりやすい条件が形成されていたと考えることができる。
昭和47年7月 豪雨	昭和47年(1972年)7月9-15日の大雨災害では、広島県北部の三次市や庄原市で総雨量500-600mm超の大雨になり、崩壊や土石流、河川の氾濫等により、広島県内では39人ももの犠牲者が出る大災害となった。花崗岩類の分布地域の土砂災害が目立っており、土砂災害による犠牲者は24人であった。山県郡加計町でも土砂災害が起きて5人の犠牲者が出ており、この災害を伝えるための石碑が建立されている。
昭和63年7月 豪雨	昭和63年(1988年)7月21日には、山県郡加計町(現、山県郡安芸太田町)を中心に大雨による崩壊・土石流等が集中発生し、それによる土砂災害で14人が犠牲となった。この災害では、被災地の人々が被災状況を持ち寄り、「山津波から生命を守るために 63.7.豪雨災害」「災害誌－昭和六十三年七月集中豪雨－」の冊子としてまとめている。これによると、加計町では寛政8年(1796年)にもほぼ同じ地域で崩壊・土石流等による大災害が起きていたことや土石流等に襲われる直前の異常な現象(前兆)などが祖先から言い伝えられていて、それを念頭において注意・対応していたことで間一髪で難から逃れ、命を守ることでできていた人々が多数いたことなどがわかる。
平成11年6月 豪雨	平成11年(1999年)6月29日には、朝からの雨が14時過ぎ頃から強雨になり、15～18時にかけて広島市佐伯区や安佐南区、安佐北区、呉市などを中心に崩壊・土石流等が多発し、32人ももの犠牲者(うち、24人が土砂災害による)が出る大災害となった。この災害では人口密度の高い都市部周辺の山際で被害が目立ったが、土砂災害のハザードマップの公開がなされていない時代の災害であったことから、被災後にはハザードマップ公開への世論が高まり、翌年、平成12年6月から広島市がハザードマップの公開に踏み切った。その後、多くの自治体にその動きが拡大し、広島県もホームページの中でも公開し始めるなど、ハザードマップが公的に公開されることにつながった。また、国としても、平成12年「土砂災害防止法」を新たに制定し、平成13年から施行している。この法律では、土砂災害になる危険性のあるところを基礎調査によって明らかにし、「土砂災害警戒区域(イエローゾーン)」「土砂災害特別警戒区域(レッドゾーン)」として指定・公表することになった。雨情報等についても、リアルタイムで防災に利用可能なように公開する動きが進み始めた。「6.29広島土砂災害」はそれらのきっかけとなった災害として知られている。
平成26年8月 豪雨	平成26年(2014年)8月20日、いわゆる「8.20広島土砂災害」が発生、関連死3人を含めて77人ももの犠牲者が出る甚大な災害となった。発災前夜にも一時的に強雨があり、広島市には22時前には警報が出されたが、その後、20日1時過ぎまでは小止みとなっていた。しかし、線状降水帯が形成され、1時半頃から4時過ぎにかけて、広島市安佐南区の八木・緑井地区や安佐北区の可部東や大林地区を中心に豪雨が集中し、3時過ぎから4時過ぎにかけて崩壊・土石流等が集中的に発生し、土砂災害の多発につながった。1時15分に広島市域に土砂災害警戒情報が出されていたが、まっ暗な時間帯でもあったことから、広島市からの避難勧告(当時)の発令は災害発生後の4時15分以降となり、避難情報の発令の問題が露呈した。その後、内閣府でも避難勧告等の情報を躊躇なく発令できるようにするための議論が交わされ、大雨前や台風襲来時などに早い段階からの避難勧告等の発令の動きが全国に一気に広がるきっかけとなった。
平成30年7月 豪雨	平成30年(2018年)7月5-7日、いわゆる西日本豪雨により、各地で崩壊・土石流等が集中発生し、広島県内で109人の死者、5人の行方不明者、その後の災害関連死44人という甚大な災害が発生した。この災害では、6日夜と7日未明に強雨があり、それが引き金となっていたが、防災気象情報や避難情報は崩壊・土石流等の集中発生する時間帯より早い段階で伝えられていた。しかし、多くの住民は避難のタイミングが遅れてしまい、避難途中に命を失った人も広島県内に20人以上いたとされている。結局、災害や防災の必要性を「自分ごと」として捉えることができていなかったことがあらためてクローズアップされた災害となった。
令和3年8月 豪雨	令和3年(2021年)8月半ばには、降り始めからの雨量が数日間で400-500mm超になり、広島市西区や安佐南区の一部で崩壊や土石流等が発生し、人家や道路などに被害が出た。一連の降雨の後半に雨量強度の大きなものがなく、2018年7月豪雨の時のような多数の土石流等の発生する状況にはならず済んだ。

1.取組の目的・概要(つづき)

(3)実施 内容	①取組の全体像 と実施項目	1. 映像制作 (1)ヒアリング映像の撮影 - 地域防災リーダーの考え方や活動内容、工夫、秘訣、課題に感じていること、克服に向け必要に感じていること等を映像化する - 地域防災リーダーが直接体験した災害は以下のとおり（いずれも土砂災害）。 - 平成11年6月豪雨災害 - 平成26年8月豪雨災害 - 平成30年7月豪雨災害 (2)ヒアリング結果とりまとめ - 上記ヒアリングで得られた知見をとりまとめる
	②取組の成果物	地域防災リーダーの考え方や活動内容、工夫、秘訣、課題に感じていること、克服に向け必要に感じていること等をまとめて、映像化されたもの
	③取組による効果	映像化により地域防災リーダーの考え方や活動内容、工夫や秘訣、課題と感ずることやその克服に向けて必要と感ずること等を相互に共有できる形にすることで、他の地域とのネットワーク化や防災教育への活用が可能となり、被災体験談や災害の記録誌等と合わせて、将来の防災を積極的に考える若い世代を増やせる効果が期待できる。

1.取組の目的・概要(つづき)

(4)実施スケジュール	・ 2025年12月2日 第1回会議の開催（広島関係者@広島県砂防課） ・ 2025年12月16日 第2回会議の開催（広島関係者@広島市豪雨災害伝承館） ・ 2025年12月24日 第3回会議の開催（広島関係者・内閣府） ・ 2026年1月14日 第4回会議の開催（広島関係者・内閣府・民間事業者） ・ 2026年2月2～9日 地域防災リーダーへのヒアリング映像撮影 ・ 2026年2月2～28日 文字起こし・映像編集 ・ 2026年3月1～9日 成果報告書を作成 ・ 2026年3月10日 内閣府が指定する民間事業者等に成果報告書を提出 ・ 2026年4月上旬 広島市豪雨災害伝承館にて成果報告会を実施予定 ・ 2027年3月 「地域の砂防情報アーカイブ」サイト（広島県砂防課運営）にヒアリング映像を掲載予定
(5)実施体制・役割	広島大学防災・減災研究センター ・ 担当：海堀正博 中電技術コンサルタント株式会社 ・ 担当：桑田志保、石田響 広島市危機管理室災害予防課 ・ 担当：脇田知茂 広島市都市整備局都市整備調整課復興まちづくり係 ・ 担当：今谷幸生、酒井元樹 広島市豪雨災害伝承館 ・ 担当：松井憲 広島県土木建築局砂防課 ・ 担当：宗貞孝太郎、狩野涼介、古川真也 NPO法人SKY協働センター ・ 担当：大迫雅俊

2.実施内容

(1)実施
内容

①ヒアリング映像
の撮影について

・ 防災リーダーの考え方や活動内容、工夫、秘訣、課題に感じていること、克服に向け必要に感じていること等を映像化する

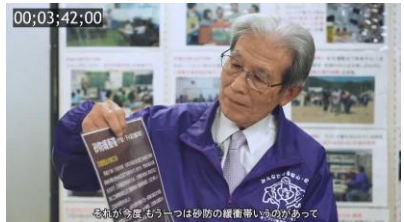
・ ヒアリングの日程は以下のとおり。

日時		対象者	場所	備考
2026年2月2日	10:00～15:00	広島市豪雨災害伝承館 高岡正文館長	広島市豪雨災害伝承館	平成26年8月豪雨災害 で被災
		広島市豪雨災害伝承館 畠堀秀春副館長		
		広島市豪雨災害伝承館 松井憲副館長		
2026年2月4日	10:00～12:00	東広島市八本松町 牧野美三夫氏	八本松地域センター	平成30年7月豪雨災害 で被災
	14:30～16:30	広島市安佐南区伴 原田照美氏	沼田公民館	平成11年6月豪雨災害 で被災
2026年2月5日	12:30～15:00	広島市佐伯区河内 杉田精司氏	河内公民館	平成11年6月豪雨災害 で被災
	15:30～17:30	府中町 三好一氏	府中公民館	平成30年7月豪雨災害 で被災
2026年2月9日	13:00～15:30	坂町 大迫雅俊氏	坂町災害伝承ホール	平成30年7月豪雨災害 で被災

・ ヒアリング項目は以下のとおり

	ヒアリング項目
1	被災された災害と被災時の状況（自宅及びその周辺の状況、避難先の状況など）
2	地域防災に積極的に取り組まれるようになったきっかけ
3	取り組んでこられた代表的な内容、工夫、うまく進めるための秘訣等
4	今後に向けて取り組んでいこうとされていること
5	課題や苦労話、次世代の若者や他地域の人たちに向けて、ぜひ伝えておきたいこと等

2.実施内容(つづき)

(1)実施 内容	②ヒアリング結果と りまとめ	広島市安佐南区沼田町 原田照美さん - 原田さんは、平成7年(1995年)1月17日に発生した兵庫県南部地震(M7.3)による阪神・淡路大震災を見て、自分たちの地域でも活断層の地震による被害があり得ることから、地域防災活動を始めている。当初は、地震動によって家屋倒壊などの被害の想定を手作りマップ化して地域内で公開しようとしたが反対意見も多く公開には至らなかった。 - しかし、平成11年(1999年)6月29日、豪雨により当該地区でも崩壊・土石流等が多数発生、犠牲者も出てしまったことから、豪雨による土砂災害も念頭 においての防災活動を本格的に開始した。 - 発災当時はまだ公的なハザードマップの公開がなされていなかったが、自分たちの手作りの防災マップを使って、毎年、想定された災害に対する警戒や避難などの防災行動の訓練、避難所までのルートのチェック、炊き出し訓練、救護訓練、避難所での宿泊訓練、花火大会とその後の消火訓練等々を小学校区単位で持ち回りで実施し、災害ならびに防災活動の大切さを伝承し続けている。 広島市佐伯区河内地区 杉田精司さん - 杉田さんは、昭和26年(1951年)10月13-15日のルース台風の暴風雨による災害を11歳の時に体験していたが、それから48年後の平成11年(1999年)6月29日に起きた豪雨災害に大きな衝撃を受けた。大きな被害を受けたものの、ルース台風後の河川の整備や魚切ダム、荒谷砂防堰堤などの整備のおかげで被害をずいぶん抑えられたこともあり、防災の大切さを実感、人の命と地域を守る防災活動をしなければならないとの強い思いで、福祉の観点も含めた防災活動に着手している。 - 毎年追悼式を開催しているほか、「6.29土石流災害の記録」(2001)、「ふるさと河内古今探訪」(2011)、「忘れまい大災害」の石碑の建立(2012)、「河内散策ガイドブック」(2012)、「河内地区戦後70年のあゆみ」(2015)、「河内地区土砂災害防災ボード」制作(2017)、「河内ウォーキングマップ」(2018)、「6.29大災害の記録(DVD)」(2019)、「河内の山と川の歴史」(2020)作成の他、町民運動会に救助担架リレーや車椅子リレーなどを導入したり、地域の過去の災害を紙芝居化して伝えたり、防災マップを作成配布(2020年には改正4版)というように、地域防災活動を継続してきている。	 00:17:14;14 - 通常版：08'08" - ダイジェスト版：05'18"  00:03:42;00 - 通常版：11'44" - ダイジェスト版：05'44"

2.実施内容(つづき)

(1)実施内容	②ヒアリング結果と りまとめ(つづき)	「広島市豪雨災害伝承館」館長 高岡正文さん - 高岡さんは、平成26年(2014年)8月20日の豪雨災害に遭遇した。外出中だったため、土砂を乗り越えて被災している自宅まで帰りつき、家族に会えたときにはホッとしている。避難所には行かず、隣の実家の両親とともに実家で過ごした。 - 翌平成27年度から3年間、町内会長を務める間に、梅林小学校区の社会福祉協議会と自主防災会連合会の役員にもなったこともあり、避難訓練や防災マップ作りにも携わってきた。梅林学区の復興まちづくり協議会の事務局長にもなったことから、しだいに積極的に地域防災活動にも取り組み始めた。 - 若い世代、児童・生徒・学生などに、災害や防災を自分ごととして考えて取り組んでもらえるように、防災活動のイベントやカリキュラム作りを他の副館長らといっしょに行ってきた。 - 何か異常なことが起きたとしても準備ができていれば対応できる。「広島市豪雨災害伝承館」をうまく使って多くの人に備えることの大切さを伝えていきたいし、多くの人に伝承緩に来て学んでいって欲しい。 「広島市豪雨災害伝承館」副館長 畠堀秀春さん - 畠堀さんも、平成26年(2014年)8月20日の豪雨災害に遭遇した。仕事で外出していたが、家族からの真夜中の電話で自宅が被災していることを知り、緑井の職場からようやく4時半頃に自宅近くの山裾まで戻れ、その後、薄明かり状態になって大規模半壊の自宅までたどり着いた。家族の顔を見て安堵を感じている。 - 被災の1年後の8月に、ボランティアの人から何か助成金の話聞いたがしばらく考える気になれず、被災者という立場で泥かきを続けていた。ようやく11月くらいに再度そのボランティアの人に話しを持ちかけられてから、今のもう一人の副館長の松井さんらとも話をし考え方を考えることにした。 - そして、「復興交流館モンドラゴン」という名前を付けた建物で、お好み焼きを作って食べながら、被災者の憩いの場、ボランティアやその他大勢の人も交流に訪れる場・くつろぎの空間として運営してきた。「広島市豪雨災害伝承館」にその役割の多くが移されたが、今もお好み焼きを焼いて親しまれている。 - そんな中で防災に関する知識を身につけることを始めた。あらゆる年代の人に「自分たちの命は自分らで守ろうよ」をスローガンに、それぞれの家庭で防災マイタイムラインを考えてもらうなども呼びかけてきた。この伝承館で、みんなが得意なところを持ち寄って備えることの大切さ、語り継ぐことの大切さを感じている。	 00:09:18:25 - 通常版：09'52" - ダイジェスト版：05'45"  00:08:00:10 - 通常版：11'50" - ダイジェスト版：08'58"
----------------	--------------------------------	---	---

2.実施内容(つづき)

(1)実施 内容	②ヒアリング結果と りまとめ(つづき)	「広島市豪雨災害伝承館」副館長 松井憲さん - 松井さんも、平成26年(2014年)8月20日の豪雨災害に遭遇した。前夜からの大雨に疲れを感じ、20日1時頃からは寝入ってしまった。やや明るくなり始めた4時頃になって、妻から起こされ、異様な静けさと樹木の皮を剥いだ香りなどに気がつく。屋外には土砂や流木が溜まっていて、外に出ることはできなかった。ようやくの思いで泥の中をかき分けて、妻とともに土砂のないところに行けたのが午後1時半頃だった。 - その後は毎日土砂かきや片付けなどの復旧作業をするために通う生活を続けていた。しばらくして、現在、伝承館の副館長をしている畠堀さんから声をかけられ、コミュニティが無くなって話もできなくなっているお年寄りや子供らのために、「復興交流館モンドラゴン」を立ち上げることになった。そこではお好み焼きを焼いて販売し、いろんな人が集まって話ができる場を提供してきた。7年間で約2万人の来客数となった。そこでは災害の伝承と復興をテーマにしていたが、防災のための知識も増やすことを目指した。 - それらがもとになり、令和5年(2023年)9月1日の「広島市豪雨災害伝承館」開館につながった。「あの時のつらい思いを二度と子や孫や一般の人に経験してほしくない、もし災害になっても犠牲者が一人も出てほしくない」をコンセプトに、防災・減災の啓発を行うと同時に、展示スペースだけでなく、自分や家族などの命を守るためのスキルやテクニックを学べるスペースも確保し、それらの普及にも努めてきた。	 - 通常版：11'03" - ダイジェスト版：08'36"
---------------------	--------------------------------	---	---

2.実施内容(つづき)

(1)実施内容	②ヒアリング結果と りまとめ(つづき)	広島県安芸郡府中町 三好一さん - 三好さんは、平成26年(2014年)4月に、町内会長からの依頼で町内会の中に自主防災組織を作ることになった際、自主防災担当となったが、その年の8月に、「8.20広島土砂災害」が発生した。この豪雨による土砂災害は府中町には起きなかったが、被災した広島市安佐南区八木地区には「蛇落地悪谷(じゃらくじあしだに)」の地名があって今は「上楽地」「足谷」に変わっていることを知り、府中町にも同様な災害につながる旧地名や言い伝えがあるのではないかと歴史的な観点から調べ始めた。また、山の中にある治山堰堤や砂防堰堤などの施設がいつごろ、なぜ作られたのかにも興味を持って調べ始めた。 - また、近くを流れる府中大川と榎川に量水標を作ってもらうなど、水位の多少を誰もが感覚だけでなく数値でも把握できるようにした。 - 不審火による火事も発生し防火パトロールなどでも地域住民に協力してもらえた。 平成30年(2018年)7月豪雨の時には榎川で7月6日と10日に土石流が発生し、川からあふれた濁水流によって多くの家が被災した。避難情報が発令されても逃げない人、聞こえない人、どこに避難するべきかわからない人には、戸別訪問して避難の必要性和避難先を伝えた。 - ボランティアのあり方や受け入れの可否、災害時の連絡手段に問題を感じたこともあった。 - 災害後は、災害記録の作成(2018)や町に元気を取り戻すための「秋の例大祭(豊作を祝う秋祭り)」に江戸時代から続いている奉納囃子を行ったり(2018)、町内会で考える防災を目指しての防災学習や災害現場見学などとともに、有志で『府中町災害記録史ー江戸から令和ー』(2021)を刊行するなど、地域で協力しながら継続的に町民への災害と防災の歴史を伝承することに力を注いでいる。 - 災害は複数の町内会や市町をまたいで起きるものだから、みんなで協力して対応しないとうまくいかない。防災は一人ではできないから、みんなで協力しながら行うことが大切だと考えている。
----------------	--------------------------------	--



- 通常版：09'21"
- ダイジェスト版：06'15"

2.実施内容(つづき)

(1)実施内容	②ヒアリング結果と りまとめ(つづき)	東広島市八本松町 牧野美三夫さん ・ 牧野さんは、八本松住民自治協議会副会長兼防災部会長として地域の自主防災活動を牽引してきている。 ・ 平成26年(2014年)春に、住民自治協議会を通して東広島市からの依頼があり、自主防災活動を始めることになった。そんな折、平成26年8月20日、広島市内で豪雨による土砂災害が発生した。線状降水帯が形成されたことによる災害だったが、八本松地域でも起きるかもしれないとの思いから、9月にまずは自分たちの地域で自主防災会を立ち上げた。 ・ 東広島市危機管理課や社会福祉協議会とも相談して指導を仰ぎながら、避難訓練や避難所の開設訓練などを進めていた。「8.20広島土砂災害」の後だったこともあり、住民の参加率は非常に高かった。 ・ 平成30年4月には、東広島市住民自治協議会の防災部会として、八本松地域にあった13の自主防災会をとりまとめて活動することになった。 ・ しかし、「平成30年(2018年)7月豪雨」があり、八本松地域でも数多くの崩壊・土石流等が発生し、居住エリアに土石流土砂や濁流が到達するなど、大きな被害が発生した。幸いにも、それ以前からの自主防災活動が奏功して、地域住民みんなで協力しながら、土嚢作りで泥流の流入を防いだり、発災前・発災時・発災後のそれぞれの段階で住民自らが防災のために役立つ活動を行うことができていた。 ・ その後は、宿泊型の避難訓練をしたり、小学校の防災学習をした子供たちが帰宅後に学習したことを父母らに報告する過程で学びが深まったり、災害復旧工事の現場を見学したり、林野庁職員や工事現場の職員から話を聞く機会を持ったり、東広島市防災士ネットワークのメンバーとの交流で得た知識を伝えたりしてきた。 ・ 避難所のトイレや空調等の環境改善にも取り組んでいる。避難所まで来れない人もいるので、近くのお寺に協力を要請して、非常時には使わせてもらえるようにしている。近年は防災リーダーの高齢化も進み、若者世代に関心を持って防災訓練等に参加してもらえるよう工夫を凝らしている。	 ・ 通常版：09'08" ・ ダイジェスト版：06'56"
----------------	--------------------------------	---	---

2.実施内容(つづき)

(1)実施内容	②ヒアリング結果と りまとめ(つづき)	広島県安芸郡坂町 大迫雅俊さん - 大迫さんは、平成30年(2018年)7月豪雨災害の時は消防団員の一人として、土砂崩れや土石流等で家屋被害の出た地域で活動中に、一瞬の判断での行動が生死を分ける現実を痛感した。自宅も、曾祖父が土石流からの被害を受けないように築いてくれていた頑丈な石積みの塀を、使い勝手の面から一部壊して家裏の出入口としていたが、そこから大量の土砂が入り込んで大きな被害を受けた。先人が命を守るために残してくれていた備えを自ら壊して被災してしまい、自分の心に重くのしかかることになった。災害後は自身の被災体験とその後を受けた多くの支援、また、支援のあり方を考えるようになった。 - ボランティアの人たちや外部からの支援のおかげで立ち直れてきたが、そのような関係はいつまでも続かないだろうという思いと、自分の地域に継続的に被災者支援に関わっている人がほとんどいないことに気づいたことで、危機感を抱いた。社会福祉協議会や広島NPOセンターに相談して、住民主体で復興まちづくりに取り組む団体としてNPO法人SKY協働センターを立ち上げた。 - 坂町の保育園や小学校と連携しながら、防災を教えるものとしてではなく、いっしょに作るものとして取り組んで、子どもを起点とした地域防災づくりに力を入れている。子どもたちが関わる取り組みには、大人は驚くほど協力的になること、子どもたちの活動が地域の防災意識を再び動かすきっかけとなることがわかった。日常の中で無理のない形で、子どもたちを中心にしながら大人たちが協力して、地域全体で防災に取り組んで行けたらと思っている。 - 自分の住む集落では土石流やがけ崩れで大きな被害を受けた経験と、高齢者が多い地域特性を踏まえて、近所同士で支えあって避難する体制づくりに取り組んでいる。高齢者本人だけでなく、離れて暮らす家族とも連絡が取れるようにして、その情報を近所全体で共有できるようにしている。具体的には、平時からいつ、どこに、どんな方法で避難するのか、誰といっしょに避難するのかを近所同士で話し合い、連携・連絡方法を含め決めている。大雨警報が出れば、直ちに近所で声を掛け合い、LINEで連絡して安否確認をする。この繰り返しがいざという時に確実な行動につながると考えている。 - 日頃からつながっておくことの大切さ、まずはあいさつからで良い。避難場所を子どもたちの遊び場にしたり、地域の人が集まって語り合う場所にするなど、日常の取り組みそのものが防災活動だと思っている。	- 通常版：12'45" - ダイジェスト版：08'10"
----------------	--------------------------------	--	---

2.実施内容（活用したデジタル技術）

(2)活用 したデジタ ル技術	①4K動画による 撮影	・ 撮影は4K動画とすることにより、編集作業による画質の劣化を防止した。ただし、インターネットサイトに掲載する動画は高速回線が必要となるため、2K動画に変換したものを使用する。
--------------------------------	------------------------	--

3.来年度以降の計画等について

(1)来年度以降の計画について	①来年度以降の取組方針 (成果物の普及先についても記載)	- 平成22年7月庄原災害、平成30年7月豪雨災害（水害）など、対象災害及びヒアリング対象者を拡大する - 得られた知見を冊子にとりまとめる
	②本格的な実践活動の内容 (成果物の活用方策等)	「地域の砂防情報アーカイブ」サイトへの掲載 - 広島県出前講座での活用
	③来年度以降の実践活動のスケジュール	2026年4月 広島市豪雨災害伝承館にて成果報告会を実施 2026年5月～ ヒアリング対象者の拡大、とりまとめ資料作成 2027年3月 「地域の砂防情報アーカイブ」サイトにヒアリング動画を掲載
	④来年度以降の実践活動の実施場所	広島県内
	⑤実践する防災教育で連携する団体、自治体	- 広島県土木建築局砂防課、広島県危機管理監危機管理課、広島県みんなで減災推進課 - 広島市危機管理室災害予防課、広島市都市整備局都市整備調整課復興まちづくり係 - 広島市豪雨災害伝承館 - 坂町災害伝承ホール - NPO法人SKY協働センター - 広島市防災士ネットワーク
(2)今後の課題について		- 地域の防災リーダーとなっている方々も含め多くの被災者は、被災前には自分が災害に遭遇するとは思っておらず、被災してはじめて自分ごとだったことに気づいている。その経験から、被災地を中心に、二度と同じような悲惨な経験と苦しみを味わわないで済ませられるように、災害の状況や防災の大切さを将来に伝えていこうと尽力されている。 - 個人個人の思いだけでなく、それが若い世代や被災体験のない人々にも「自分ごと」として捉えてもらえるように伝え続けていくには、地域防災としての取組を継続・継承していけなくてはならない。その課題克服のヒントを引き続き追求していきたい。

4.まとめ

(1)まとめ	・ 本団体は、それぞれの地域で活動する防災リーダーの活動を持続させるため、防災リーダーの考え方や活動内容、工夫、秘訣、課題に感じていること、克服に向け必要に感じていること等について、映像資料としてとりまとめた。 ・ 今後、この映像資料を広島県が運営する「地域の砂防情報アーカイブ」サイトに掲載し、得られた知見を冊子にとりまとめ、情報共有することで、他の地域とのネットワーク化や防災教育への活用が可能となり、被災体験談や災害の記録誌等と合わせて、将来の防災を積極的に考える若い世代を増やせる効果が期待できる。 ・ さらに、対象災害及びヒアリング対象者の拡充を図り、そのノウハウや課題等を次世代や他の地域に繋げていくための仕組みを構築する。
(2)他地域への展開（横展開）の可能性や課題	・ 本取組の成果は、広島県が運営する「地域の砂防情報アーカイブ」サイトへの掲載を予定しているが、日本災害伝承ミュージアム・ネットワークやNIPPON防災資産のネットワークを通じて、横展開を図っていきたいと考えている。意見交換を定期的に実施できる場を設けていただきたい。
(3)活用したデジタル技術の有用性や課題	・ 広島県はこれまで多くの土砂災害を経験しており、地域で高まった防災意識のもとに災害記録を作成したり、石碑等を建立したりする等、教訓の伝承に取り組んでいるが、被災者や地域防災リーダーの生の声（動画）を記録した資料は多くなかった。 ・ 過去の災害より継続して活動されてきた地域防災リーダーも高齢となり、活動の継承に不安を覚える声があがっていたため、本取組を通して、生の声を記録できたことは非常に有用であると考えます。 ・ 今回は期間が短く、対象者を限定して実施したが、今後対象者や内容を拡充し、コンテンツを充実させていきたい。
(4)今後想定される大規模地震（南海トラフ地震、首都直下地震等）を見据えた取組や対応（ある場合は記載）	・ 該当なし